

岡

〔古事記傳 四十二〕山尾、凡て山に袁と云るに二あり、一には高き處を云、上卷に、谿八谷峽八尾オキヤクニヤチヤチに谷に對へて云へれば、峽は高處なること知べし、古書に、高處を云袁に、多く峽字を用ひたり、山間を云意には非ず、尾は借字なり、さて此峽八尾の袁を、書紀には、丘と書れたり、此字も袁と云ひたり、用高山尾上、坂之御尾、御尾、神の事、傳十卷に云るは、違へり、中卷水垣宮段に、坂之萬葉に向ムカフ峽八峯、峯之上タヤツタノウは、峯字を書るは、高處なるを以てなり、然れども袁は必しも峯にムカフは、高處を袁と云に、加を添たる名にて、加は、すみか、ありかなり、萬葉七仁、向岡とも書り、これらり、坂の加も同じ、されば丘字なり、尾と書るは、みさて今一は、尾頭オカシラの尾にて、鳥獸などの尾も同く、山の皆高き處を指て云るなり、尾と書るは、みさて今一は、尾頭オカシラの尾にて、鳥獸などの尾も同く、山の裔ウラの引延たる處を云り、山には、腹とも足とも常に云、記中に御ミ富登トミノリなどもある類にて、尾とも云なり、此は其なり、山上に對へて云るにて、知べし、中卷白檮原宮段に、歎火山之北方白檮尾上、また古今集上春歌に、山櫻わが見に來れば春霞峯にも尾にも立かくしつ、これらは尾なり、然るに、右の二まぎらば、多く尾字を、よ詳ならず、ざるがごとし、く辨ふべし、

〔新撰字鏡〕土丘土居有居虚虚吹吹二反、小陵、〔同〕陵陵同、力承反、使也、恭也、馳也、大阜

〔倭名類聚抄〕山谷丘、周禮注云、土高曰丘、音鳩和名乎加

岡 丘也、正作岡

〔箋注倭名類聚抄〕山石所引、大司徒注文、說文、丘土之高也、與此同義、按四方而高曰丘、見淮南子墜形訓注、四方高中央下曰丘、見說文一說、及風俗通、釋名丘聚也、又山脊曰岡、見爾雅、詩毛傳、說文、釋名皆同、釋名又云、岡亢也、在上之言也、王念孫曰、岡之言綱也、是丘岡和名雖同、其實不同也、新撰字鏡、丘字陵字同訓、按乎指言高處、神代紀、峽八尾、懿德紀、曲峽、神功紀、淳中倉之長峽、峽字訓乎、萬葉集向峯、八峯、峯字訓乎是也、加處也、與坂訓佐加之加同、山田本岡作岡、岡作岡、按玉篇、岡俗作岡、則從山非正字、山田本云、又用岡字、正作岡為是、然諸本皆與舊同、其云正作岡者、疑後人所校改、非源君之舊、